

Jane Eyre 再考

—Janeの問いが意味するもの—

村 瀬 順 子

はじめに

Charlotte Brontë (1816-55)は *Jane Eyre* (1847)を執筆するにあたり、John Bunyan (1628-88)の *Pilgrim's Progress* (1678, 1684) を一つのモデルとして用いていると言われている。幼い Jane が Mrs. Reed に正面から反抗し、怒りを爆発させた後に発する 'What shall I do?' という問いは、Christian が「滅亡の都市」を見せられて発する 'What shall I do to be saved?' という問いに重ねて読むことができる。そして、Jane は人生の門出としての Gateshead を出発し、Lowood, Thornfield, Marsh End での試練を経た後、最後に幸福の地 Ferndean へと向かうのである。しかしながら、揺るぎない信仰によって天の門に入り救われるのは Lowood で Jane が出会う Helen Burns であり、物語の結末においてインドで殉死する St. John Rivers ではあっても Jane ではない。Jane が選んだのは、愛する Rochester との地上的な天国である。福音主義者の Mr. Brocklehurst に「地獄に落ちないためにはどうすればよいか」と聞かれて、「いつまでも健康で死なないこと^①」だと Jane が答えるのは単に子供ゆえの無知と反抗にすぎないとは言いつれない。何故なら、成長した後の Jane もまたインドへの同行を強いる St. John に向かって「神様は投げ捨てるためにわたしに命を与えてくださったのではありません^②」と言い放つからである。過去を回想しつつ語る Jane の一人称の語りには確かに Jane の精神的成長を跡づけてはいるが、Jane の成長は果して J. P. プチが言うように「キリスト教的道徳の修業^③」と呼ぶべきものであろうか。人間的な世界に拘泥する Jane に永遠なる世界を目指すことを教えるのは Helen Burns であるが、天上の世界を信じて死んで行く Helen を見ながら Jane は「その国はどこにあるのだろうか。存在するのだろうか。」('Where

is that region? Does it exist?')^④と問いかけ、Helen を必死で死なせまいとする。Jane は Helen Burns のようにこの世を神の永遠の世界に至るまでの仮りの地として達観し、自己否定と忍従の生活に甘んじるなどということはできないし、Helen の落ち着いた中に「言しようのない悲哀」('the inexpressible sadness')^⑤を感じずにはいられない。Jane はまた St. John Rivers のように神への奉仕のために他の一切の感情を押し殺して殉教者として生きることができない。Jane に宗教的な意識があるとしても、それはあくまでも人間的で、時として世俗的とも思えるほどの地上的かつ現実的な感覚と表裏一体をなしている。しかし、そのような現実感覚があればこそ、Rochester や St. John Rivers の誘惑にさらされた時、彼らの中に潜む傲慢さとエゴイズムを鋭く見抜く目を持ち得たのではないだろうか。

キリスト教における最高の美德が自己放棄、自己否定であるのに対して、Jane が直面する問題は、女としていかに自己を主張し、いかに自分らしく生きるかということであり、Gateshead から Ferndean へと至る道程は Jane の自己発見と自己実現のための闘いの道程であったと言えるだろう。ヴィクトリア朝における理想の女性像が「家庭の天使」(the angel in the house)であったことを考えると、自己放棄や自己否定はむしろ社会全体が女性に要求していた生き方であり、当時としては Jane のような自己主張は反宗教的であり、反社会的に見えたことであろう^⑥。しかし、Jane の生き方が現代においてもなお共感を呼ぶのは、男女間の対等な愛情関係を求める Jane の闘いの中に女性が主体的に生きることを意味を読み取ることができるからであろう。Rochester と St. John Rivers によって Jane に突き付けられる誘惑は、一方は愛情という名のもとで、もう一方は神への奉仕という名のもとで、Jane に服従を要求し、Jane 本来のあり方に妥協を迫るような種類の誘惑であるからだ。Jane Eyre は頼るべき縁者も社会的な地位や財産もない天涯孤独の Jane が、自らの才能と努力によって、愛する人との幸せな結婚に至るという筋書きにおいて、読者のシンデレラ願望を満足させるおとぎ話の世界に沿っているように見え、またロマンティックな空想や情熱にあふれている一方で、男女の間で繰り広げられる支配と服従をめぐる争いをかなり赤裸々に描いた作品でもある。本稿では、Rochester と St. John Rivers という二人の男性との関係を中心に、Jane が闘おうとしたもの、そして守ろうとしたものは何かを考えていきたい。

1

男性を主人公とするビルドゥングスロマンが主人公の精神的成長とその結果としての社会的地位や名声の獲得のプロセスを描くものだとすれば、女性を主人公とするビルドゥングスロマンは、女主人公の結婚を到達点とする場合がほとんどである。なぜなら、社会的に活動の場を制限されている多くの女性にとっては社会的・経済的に恵まれた結婚をすることが、自己実現への道であり、自己実現そのものでもあったからだ。しかし、この作品において作者は、結婚が当事者、特に女性の自由を奪う一種の社会的な罣でもあることを示そうとしており、Rochester と Bertha の結婚はその典型としての意味を与えられている。

結婚というものがすなわち牢獄であるということを最も象徴的に表しているのは、Rochester が Miss Ingram らを招いてのパーティの席上、座興として演じた仮面劇 (charade) である。Rochester は、まず Miss Ingram とともに婚礼衣装を着けて登場し、“bride” ということばを表現する。ついで、舞台中央に大きな井戸をしつらえて “well” とし、charade 全体として “bridewell” (牢獄) ということばを表現する。‘bride’ (花嫁) ということばが一瞬にして ‘bridegroom’ (牢獄) に転ずるという皮肉を Rochester が charade の題材に選んだ背景には、財産目当てに自分との結婚を望んでいるらしい Miss Ingram へのあてこすりもあったであろうが、下劣で淫蕩な Bertha Mason と結婚したことで、心の自由と平和を奪われている彼自身の結婚に対する実感を Rochester らしく自嘲的に表現したものと考えられる。

しかし、10年以上もの間、Thornfield の屋敷の屋根裏に、使われなくなった家具や調度品がしまいこまれているのと同じように監禁されている Bertha にとっては結婚は文字通り牢獄そのものである。Rochester の中に果してそのような認識があっただろうか。Rochester は、Bertha の存在が暴露されて Jane との結婚が阻止された時、自分がいかに貪欲な父と兄の計略にはまって、Bertha と結婚させられたか、そして精神病の血筋を持ち、低俗で不道德な妻のためにいかに自分が地獄のような生活を強いられ、若くしてすでに人生に希望を無くした人間になってしまったか、そして、発狂した妻を監禁した後、自分がいかに必死の思いで真実の愛を求めて放浪したかを Jane に訴える。その Rochester の訴えは確かに同情に価するが、しかし、

話が一方的すぎはしないだろうか。かつて Mr. Brocklehurst から嘘つきという汚名を着せられた Jane に対して、Miss Temple が自己弁護の機会を与えたように、Bertha の側にもそれなりに言い分があるはずである。その意味で、Jane が Rochester に向かって次のような指摘をするのは全く当を得ていると思われる。

‘Sir,’ I interrupted him, ‘you are inexorable for that unfortunate lady: you speak of her with hate—with vindictive antipathy. It is cruel—she cannot help being mad.’ (p. 328)

Bertha の狂気がどの程度のものであったのかはわからないが、10年もの間、屋根裏のおりの中に監禁されていたことが、一層、精神異常を悪化させたであろうことは十分考えられる。狂人を監禁するというのは当時としては当たり前のことであり、発狂しているという医師の診断は Bertha の存在を隠すための監禁という手段に合法性を与え、Rochester はそれによって良心の苛責を免れているのであろう。しかし、「Bertha には何日か、あるいは何週間も正気にかえる^⑦」ことがあり、Rochester をのしるという。結婚式の前夜に Jane の部屋に忍び込み、鏡に向かって婚礼のヴェールを自分の頭にかざした後、それを引き裂いた Bertha は狂っていたのか、それとも正気であったのか。Bertha は、Rochester を焼死させようとしたが、結婚式の前夜ですら Jane に危害を加えようとはしなかった。妹を心配してマデイラから訪ねてきたメイソン氏に咬みついたのも、Rochester と政略結婚をさせた父や兄への恨みのせいであると考えられる。Rochester は ‘such a monster’ とか ‘a wild beast’ ‘a goblin’ と呼び、「あの狂人は狡猾で性悪だ」(‘The lunatic is both cunning and malignant.’^⑧)と云うが、Bertha の行動は、それなりにつじつまが揃っていることを考えると Bertha が全くの狂気に陥っているとは断言できないように思われる。

確かに狂人に発言権を与えることは社会の秩序を乱し、社会の転覆につながりかねない危険性を持っている。がしかし、弱者の口封じのために狂気ではないものを狂気と称することによって権力で押さえ込むということもまた可能であることは歴史が証明している^⑨。Bertha の監禁は、そこまで恣意的ではないかもしれない。Bertha は確かに随分狂っていたのかもしれない。しかしながら、彼女には正気に戻る時がたびたびあり、そして正気に戻る時、

彼女は Rochester にとって最も危険な存在となる。それは、Bertha が Rochester の悪口を言い立てることでふたりが実は夫婦であるということを世間に暴露し、人生をもう一度やり直したいという Rochester の願望を粉碎しかねないからだ。Rochester が各地を放浪しながらも彼にとっては忌まわしい Thornfield に度々舞い戻って来ざるを得なかったのは、彼のそうした不安のなせるわざと言えるかも知れない。そして、Rochester は Bertha への監視を強めるべく、付き添い人の Grace Poole に高額の給料を払って我が身の安泰を計るのである。Rochester は先に引用した箇所した後で、自分は Bertha が発狂しているから憎んでいるのではなく、もともとの下劣で不道徳な性質そのものために憎んでいるのだ、たとえ Jane が発狂しても自分は Jane を愛しつづけるだろうと弁明しているが、それは逆に言えば、Bertha の狂気は単に監禁の口実に過ぎないということである。Rochester は財産目当ての Bertha との不幸な結婚生活を 4 年間耐えた後、兄と父の相次ぐ死によって莫大な財産を相続し、Bertha の財産に頼る必要がなくなるやいなや、Bertha の発狂を理由に監禁という手段に出るからである。

Rochester との結婚は Bertha の側から見るとどのように見えるのだろうか？ しかしながら、Bertha には公に発言する機会は一切与えられていない。Bertha は発狂しているためにしゃべれないわけではない。Rochester の不利になることを喚き立てるというのだから。しかし、狂人を封じ込めて発言させないという事実は社会の権力構造に支えられた Rochester の権力を象徴している。Rochester の一方的な discourse によってことばを封じられている Bertha に残されている道は暴力しかないのかもしれない。

Sandra Gilbert と Susan Gubar は *The Madwoman in the Attic*^⑩ において、Bertha の存在に注目し、Bertha を女の怒りの象徴、Jane の中に潜在する反逆精神に通じるもの、さらには Jane の分身であると解釈している。また Jean Rhys (1890-1979) という現代女流作家は、Bertha を女主人公とする小説 *Wide Sargasso Sea* (1966) を書いている。Rochester にとっては、自分を苦しめる怪物としか思えなかった人物に現代のフェミニストたちが興味を示すのは、Bertha の中に抑圧され周辺へと追いやられた性の象徴を見るからであろう。それは Rochester の認識に欠落している部分であり、Jane が闘うべきものは、単に妻の存在を隠していたということではなく、Rochester のそうした認識そのものである。作者がどこまで意識的であったかはわから

ないが、そのように考えると、作者が Rochester から片腕と両目を奪いとるといふかなり残酷な形で Rochester を罰していることにも納得がいくように思う。

Rochester のエゴイスティックな考え方は Jane との関係においても認められる。Jane が Rochester との身分の差を意識しながらも、精神の平等を訴えて愛を告白した時、慣習の足かせから自由になることを望んでいた Rochester は狂喜して Jane に結婚を申し込むが、二人の間に社会的・経済的な不平等が厳然として存在する限り、二人の関係は平等ではあり得ないことを Jane は思い知らされる。Rochester は Jane の愛情を確かめ、結婚の約束を取り付けた途端に Jane を自分の所有物として扱い、Mrs. Rochester にふさわしい人間として飾り立てようとするからだ。それは Jane にとっては屈辱であり、Jane は Rochester が、飾り立てた奴隷を眺めるサルタンのように自分を満足気にながめているように感じる。

I thought his smile was such as a sultan might, in a blissful and fond moment, bestow on a slave his gold and gems had enriched: I crushed his hand, which was ever hunting mine, vigorously, and thrust it back to him red with the passionate pressure. (p. 297)

皮肉なことに Jane は Rochester と婚約することによって逆に互いの距離の遠さを実感させられることになる。そのため婚約期間中の Jane は情熱にかられてわがもの顔にふるまう Rochester に対して必死に防御手段を講じなければならなくなる。Rochester と Jane の婚約を知った Mrs. Fairfax が、ふたりの間の社会的な身分・財産・年齢における余りの違いに不信感を表し、Jane に Rochester を遠ざけておくように忠告したとき Jane は反発を覚えるが、結局 Mrs. Fairfax の忠告を賢明なものとして認め、それに従うことになる。Jane が恐れているのは情熱の「深淵」(‘gulf’) に落ち込んだ後の「感情の奈落」(‘a bathos of sentiment’) であり、情熱を理性によって制御するという分別をもつことがふたりにとっての幸福につながるのだと Jane は述べているが、相手をじらすことによって結果的には相手の情熱をつなぎとめておくことになるという点では、文学史上における Jane の先達である Pamela^① との類似点を多分に想起させる部分でもある。また、女性遍歴を重ねた Rochester に対して二十歳にもならない Jane が性的な脅威を感じたと

しても不思議はない。いずれにせよ、そのような防御手段を必要と感じるほどに Rochester と Jane の関係が緊迫した状態にあることを示すことによって作者は、ふたりの関係がはらむ不安と不平等を暗示していると言えるだろう。

Rochester に Bertha という狂人の妻の存在することが判明し、Jane と Rochester の結婚が不可能になったときにも、Rochester は、Thornfield を去ろうとする強情さを Jane が示すたびに力づくで屈服させかねない様子をちらつかせる。ここでの Jane と Rochester のやりとりはそれぞれ男の武器・女の武器を使いながらの緊迫感に満ちた闘いである。Jane にとっての武器は相手の興奮を鎮めるために時には冷静に振る舞い、時には涙に訴えることであり、Rochester の武器は時には Jane の慈悲心にすがり、そして時には腕力に訴えることである。

‘Jane! will you hear reason?’ (he stooped and approached his lips to my ear); ‘because, if you won’t, I’ll try violence.’ His voice was hoarse; his look that of a man who is just about to burst an insufferable bond and plunge headlong into wild licence. I saw that in another moment, and with one impetus of frenzy more, I should be able to do nothing with him. (p. 330)

もし Rochester が Jane を凌辱することで問題を解決したとしたら、それは二人の心に癒しがたい傷を残すことになるだろう。そこには Jane が求めているような平等な男女関係はありえないのだから。「神によって与えられ、人によって認められた」(‘the law given by God; sanctioned by man’)¹²⁾ 結婚という法律に従うことが正しい道であると信じ、Rochester の情婦になりたくないと考えた Jane の倫理感は、より現代的な性道徳に照らせば因習的・保守的に見えるし、また、道徳的に考えても Rochester を見捨てることには人道的な問題があるだろう。しかし、男女の危機的状況の中で rape の危険性に身をさらしてでも断固として妥協を拒もうとした Jane の意志と「私は自分自身が大切です。孤独で友もなく支えてくれる人がいなければならないほど、ますます私は自分自身を尊重します。」(‘I care for myself. The more solitary, the more friendless, the more unsustained I am, the more I will respect myself.’)¹³⁾ と主張する自尊心の高さは、荒れ狂う Rochester の力の

論理を打ち負かす底力を発揮することになる。

His fury was wrought to the highest: he must yield to it for a moment, whatever followed; he crossed the floor and seized my arm and grasped my waist. He seemed to devour me with his flaming glance: physically, I felt, at the moment, powerless as stubble exposed to the draught and glow of a furnace: mentally, I still possessed my soul, and with it the certainty of ultimate safety. (p. 344)

狂人として社会的に権利を剥奪されている Bertha が Jane にとって何らかの警告の意味を持っていたとすれば、それは正気を失うことの危険性であろう。Jane は Rochester への情に流されてしまいそうになる中で、感情という狂気に陥って自分を見失うという過ちを犯すまいと考える。そのような Jane を Rochester から見ると次のように見える。

‘I could bend her with my finger and thumb: and what good would it do if I bent, if I uptere, if I crushed her? Consider that eye: consider the resolute, wild, free thing looking out of it, defying me, with more than courage—with a stern triumph. Whatever I do with its cage, I cannot get at it—the savage, beautiful creature!’ (pp. 344-5)

Rochester の中に Bertha に対する認識が欠落していたことと考え合わせると、Jane の中にこのような「決然とした、自由なるもの」の存在に気づいた事は Rochester の認識の広がりを示している。つまり、Jane が Rochester への愛と同情に流されて妥協するのではなく、Rochester の情熱と力の論理に屈しない主体的な論理に従ったことが Rochester の意識を変えたと言えるだろう。Rochester は Jane の失踪後、Thornfield に閉じこもり、社交界の華やかな虚飾の世界から退き、さらに Bertha が屋敷に放火した時、使用人たちを救い、Bertha をも助けようとする。象徴的な意味としては浄化の火をくぐり抜けることになるのだが、より現実的なレベルにおいては、屋根の上で喚きたてる Bertha を助けようとした Rochester が Bertha に向かって ‘Bertha!’ と名前で呼び掛けたそのことばが Rochester の内的変化を端的に物語っているように思われる。それまでの Rochester が Bertha を ‘a monster’ や ‘a wild beast’ と呼んではばからなかったことを考えると、妻の

名を呼ぶその一言は妙に人間らしさを感じさせるからである。

2

一方、「神によって与えられ、人間によって認められた法律」を守るべき正義と考えて Rochester のもとを飛び出した Jane もまた、St. John Rivers という Rochester とはあらゆる点で正反対の男性から結婚を迫られることによって、正義に基づく結婚が実はいかに非人間的なものになりうるかを思い知らされると同時に、自分が真に求めているものが何であるかを再認識することになる。

St. John Rivers は、Jane にヒンズー語を教え、神の正義と義務のために生きることを、そのためにはその他の個人的な愛情や快楽をすべて捨てよと説く。しかも、St. John は Brocklehurst のような偽善者ではなく、主義を厳格に実行する人であり、その世俗を超越した高潔さは Jane に畏敬の念をいだかせ、St. John の前では Jane は自己を主張できないでいる。

ところが、St. John がインドでの伝道のために Jane に妻として同行することを神への義務として要求した時、Jane は、彼のいかにも聖人らしい仮面の下に隠された傲慢でエゴイスティックな男の正体を見せつけられる。St. John は Jane を愛しているから結婚を申し込んだわけではない。Rosamond への情熱を理性の力で排除した St. John は、人間的な愛情をむしろ弱さとして軽蔑し、神の正義のためだけに人生を捧げ、聖者の列に加わりたいという野心を抱いている。そして、その目的に適う女性として Jane を見込んだのであり、St. John は神への奉仕という大義名分のもとに、愛情のない結婚を申し込んでも、また、妻を死ぬまで精神的肉体的に搾取しても一向に良心の苛責を感じない人間である。St. John が Jane に結婚を要求したのは、年若い女性を結婚もせずに行きさせることへの外聞の悪さを避けるためであり、結婚という合法的な手段によって Jane を完全に掌握したいという支配欲・征服欲に基づいていることがわかる。

'I, too, do not want a sister: a sister might any day be taken from me. I want a wife: the sole helpmeet I can influence efficiently in life, and retain absolutely till death.'

I shuddered as he spoke: I felt his influence in my marrow—his

hold on my limbs. (p. 431)

St. John の殉教者としての立派な仮面の背後に傲慢で横暴な人間性を感じ取った Jane が St. John に対抗できるのは、Rochester との恋愛の経験によって得られた、成熟した女としての直感を通じて、一人の男としての St. John と向き合う時である。

St. John が男女の自然な愛情を軽蔑すべきものと考えている限り、人間的な愛情を求めずにいられない Jane は、もし St. John と結婚すれば、本来の自分を抑え、全くの閉塞状態の中で生きなければならない。それは Rochester のもとを去ってでも守ろうとした自己の主体性、Rochester が垣間見た、あの「決然とした、自由なるもの」を犠牲にすることである。St. John の妹として、あるいは同志としてなら、魂の自由を自分のものとして、過酷な義務にも耐えていける。しかし、妻として精神的にも肉体的にも自由を奪われる生活には耐えられないと Jane は思う。

But as his wife—at his side always, and always restrained, and always checked—forced to keep the fire of my nature continually low, to compel it to burn inwardly and never utter a cry, though the imprisoned flame consumed vital after vital—*this* would be unendurable.

(p. 433)

結婚すれば、それなりに愛情があとから生じてくるだろうという St. John の愛についての考え方は Jane にとっては不純極まりなく、Jane は激しく反発するが、St. John はそうした人間的な愛情が理解できないほど純粹なのか、それともあまりにも世俗的すぎるのだろうか。Jane の批判にプライドを傷つけられた St. John はあたかもいつも通りふるまっているかのようにみせながら、その中により一層の冷淡さを込めることによって Jane に報復しようとする卑劣さを垣間見せる。

...he made me feel what severe punishment a good yet stern, a conscientious yet implacable man can inflict on one who has offended him. Without one overt act of hostility, one upbraiding word, he contrived to impress me momentarily with the conviction that I was put beyond the pale of his favour. (p. 436)

このような St. John の陰険さや執念深さは、高邁な志にもかかわらず、彼が狭量で自己中心的なただの人間にすぎないことを物語っている。地獄の恐ろしさを強調する St. John の説教は Brocklehurst を彷彿させ、人間らしい愛情を欠いた宗教的情熱がいかに冷酷なものになりうるかを例証している。

しかしながら、St. John がたとえどんなに狭量で傲慢な自我をひそませていようと、神の正義を掲げている以上、Jane はそれを真っ向から否定することはできない。作者は Jane の中でも Helen Burns のような自己否定の生き方を受け入れるだけの敬虔さがあることを示そうとしたのだろうか。あるいは、作者の意図はもっと深いところにあるのだろうか。黙示録の第21章を取りあげて、神の王国と地獄を描き出す St. John はまるで Jane を愛しているかのように抱擁し、優しさを示すことによって、Jane の意識を麻痺させ、一種の陶酔状態に追い込んでいる。Jane はもはや St. John との争いもこの世の幸福も捨てて、すべてを神の摂理にまかせてもよいと思うようになる。それは主体的に生きる自由を放棄することであり、Jane が誘惑に屈する瞬間に垣間見るものは、もはやこの世で生きる自らの姿ではなく死後の天上の世界である。

I was tempted to cease struggling with him—to rush down the torrent of his will into the gulf of his existence, and there lose my own...All was changing utterly with a sudden sweep. Religion called—Angels beckoned—God commanded—life rolled together like a scroll—death's gates opening showed eternity beyond: it seemed, that for safety and bliss there, all here might be sacrificed in a second.

(pp. 443-4)

ここではあたかも St. John が宗教という魔法を用いて、Jane の理性を麻痺させる魔術師のように見える。宗教的な義務やそのための自己犠牲すらも自己の主体性を奪う罠になりうるという認識は作者 Charlotte Brontë が示した精一杯のキリスト教批判ではあるまいか。

Jane が天に向かって導きを乞うた時、聞こえてきたのは天の声ではなく、地上の Rochester が 'Jane! Jane! Jane!' と呼ぶ声であった。⁽¹⁹⁾これは、後にもっともらしい説明がなされているが、Jane を St. John の誘惑から逃れさせ、Jane が真に求めるものへと導こうとする作者の *deus ex machina* であろう。

と同時に、作者がこれをキリスト教の神や天使達に対抗して「自然」がなしたわざと見なしていることは、天上の世界に対する地上世界の勝利を示しているだろう。それは冷淡な St. John Rivers に接することによって Jane の中で再認識された Rochester への思い、人間的な愛情を憧れ求める気持ちが、神を憧れ求める信仰に打ち勝ったということを示している。Rochester の声を聞いた Jane は一種の麻痺状態から覚めたように自分を取り戻し、St. John はすすすごと引き下がるしかない。

3

Jane が Rochester のもとに戻った時、もし Bertha が死なずに生き続けていたとしたら、Jane はどうしただろうという疑問は批評家がよく問題にするところである。St. John Rivers によって Rochester への愛を再確認した Jane は、非合法な関係という障害を乗り越えて Rochester と結ばれていただろうか、それとも再び Rochester のもとを去っただろうか。この問題は、St. John と出会うことによって Jane が何を得たか、認識がどのように変わったかということと関係がある。残念ながら、そうした Jane の意識の変化は明確にされていない。ただ、Rochester のことを思い切れない Jane が St. John にそのことを見破られる次のような場面がある。

‘It would be fruitless to attempt to explain; but there is a point on which I have long endured painful doubt, and I can go nowhere till by some means that doubt is removed.’

‘I know where your heart turns and to what it clings. The interest you cherish is lawless and unconsecrated. Long since you ought to have crushed it: now you should blush to allude to it. You think of Mr. Rochester?’

It was true. I confessed it by silence. (p. 439)

St. John が平凡な牧師としての職業に飽き足らず、高邁なものを求める激しい情熱のはけ口を宣教師という天職の中に見出したこと、そして Rosamond に対する情熱を自分の天職の障害になると判断して理性の力で抹殺してしまったこと、Jane が女家庭教師としての人生に飽き足らず、より活動的な生活を渴望したこと、そして自らの正義感・倫理感のために

Rochester への愛をあきらめたことを考え合わせるとふたりには共通したところが多い。St. John は Jane のいわばパロディとして、Jane の中の論理的矛盾を指摘する役割をも与えられている。妻を持つ Rochester に愛情を抱くことは ‘lawless and unconsecrated’ だと言う St. John の判断は Rochester のもとを去ったときの Jane の判断でもあるが、St. John のように Jane は割り切ることができない。何事も感情を交えず理性によってのみ判断を下す St. John の人間的な冷たさを知れば知るほど、Jane の中には Rochester の人間的な暖かい愛情を憧れ求める気持ちが強まっていったのであろうか。

自分の名を呼ぶ Rochester の声に応じて Thornfield に戻ってきた Jane はもうすでに一つの選択をしている。正義や義務よりも人間的な愛情を、そして天国よりも地上をすでに選んでいるのである。ただ、そこで作者が Bertha を死なせることで、Jane と Rochester を結婚させ、安易な解決を与えているという印象はぬぐえない。Bertha は単に Rochester と Jane の結婚を法的に阻む障害物として存在していただけでなく、結婚というものがはらんでいる男女の不平等や危険性を象徴するものであり、Jane にとっての警告の意味を持っていた。また Bertha の存在をめぐって繰り返された Jane と Rochester の闘いの危機的状況は Bertha を死なせるだけで簡単に解決するものではないはずだ。特に、Bertha が生きている限り、Rochester のもとにとどまることは情婦として生きることには他ならないと確信していた Jane と、自分には結婚する権利があり、重婚にはならないと身勝手な論理を主張する Rochester の間の争いは、次のような説明で簡単に解決されるとは思えない。

I should not have left him thus, he said, without any means of making my way: I should have told him my intention. I should have confided in him: he would never have forced me to be his mistress. Violent as he had seemed in his despair, he, in truth, loved me far too well and too tenderly to constitute himself my tyrant: he would have given me half his fortune, without demanding so much as a kiss in return, rather than I should have flung myself friendless on the wide world. (p. 465)

明らかにこの一節は、Rochester の道徳性を弁護するために付け加えられたような部分である。同様のことが、最終章において Rochester との結婚

後10年を経た Jane が語る正に平穏な結婚生活についても言える。

To be together is for us to be at once as free as in solitude, as gay as in company. We talk, I believe, all day long: to talk to each other is but a more animated and an audible thinking. All my confidence is bestowed on him, all his confidence is devoted to me; we are precisely suited in character—perfect concord is the result. (p. 476)

Jane と Rochester の結婚生活は、支配と服従といった関係ではなく、互いに平等でしかも自由である。そこには男女間の心理的駆け引きも力の闘争もなく、感情と思考のすべてを共有しあえるような一心同体の関係、Jane によれば「完全なる一致」の関係であると言う。Rochester と St. John という二人の男性との関係の中で、自己の主体性を守るために闘う Jane を丹念に描いてきたはずの作者は、ここへきて一挙に理想的な結婚生活へと飛躍している。

ただし、そのいかにも理想的に見える結婚の実現のために作者がかなり強引な方法で Jane と Rochester の立場の逆転を図っていることを見逃してはならないだろう。まず作者は Rochester に浄化の火をくぐらせ、片腕と両目を奪い、いわば骨抜きにすることで二人の闘いに決着をつけようとしている。もはや Rochester は髪を切られた Samson のように Jane の助けなしには生きられない人間になっている。無力で攻撃的なところは全くなく、Jane にとって以前のように性的な脅威を感じさせることもない。Jane は Rochester の手足となって仕えながらも Rochester に対して主導権を握ることができる。逆に Jane は、立派な教養あるいとこの出現と叔父からの突然の遺産によって、身寄りのない貧しい家庭教師の立場から、社会的・経済的に大きく引き上げられることによって、Rochester とより対等な立場に立つことになり、Rochester の財産によって Jane Eyre から Mrs. Rochester という別の人格へと作り代えられることに対するかつての不安は解消される。作者は Jane と Rochester の間に介在する社会的・経済的・性的な差異が引き起こす問題をこのように強引に解決した上で、Ferndean でのふたりの idyllic な結婚生活を可能なものに行っているのである。

Richard Chase は Rochester が不具になったのは一種の 'symbolic castration' であるとし、パイロンの魅力を持つ Rochester を日常性の中に閉じ

込めてしまったこの作品を‘myth domesticated’ということばで表している。確かにこのようにして達成された結婚生活においては、かつての Jane と Rochester のロマンティックな情熱がもつ迫力はもはや見られない。立派な社会的地位にありながら、何か人知れぬ苦悩を抱えているらしく、ヨーロッパでの不道德な遍歴を率直に打ち明ける Rochester の中に Jane は人生の奥深い部分、危険ではあるが魅力的な世界を感じとっていた。そうしたものをすべてはぎとられた Rochester にはかつてのような魅力はない。二人の結婚生活は平和な日常性と引き換えに失ったものも大きいように思われる。

しかしまた、この日常的・地上的な世界こそが Jane が安住できる場所でもあった。この作品の中で‘domesticate’されない人物がいるとすれば、それは若くして死ぬ Helen Burns と St. John であろう。St. John は Jane と Rochester の結婚を決して祝福することなく、世俗的な幸福に浸る Jane に警告を発しながら、インドでの果敢で献身的な伝道の末に、神に召されて死んで行く。その世俗を超越した偉業を Jane がことさらに褒めたたえることができるのは、Rochester との地上の天国に安住しているからこそである。死ななければならなかった St. John は、Helen Burns と同様、Jane の生き方に一石を投じる役割は与えられていても、この世を生き続ける Jane とは一線を画する世界の住人として作品世界から排除されるのである。

国教会の牧師を父とし、厳格なキリスト教の精神文化の中で育った Charlotte Brontë が、自己否定や自己犠牲を美德として押しつけてくる暗黙の精神的圧力の中で、もっと別の、もっと自分に正直で自由な生き方を Jane を通して模索しようとした時、Helen Burns や St. John Rivers に具現化されたキリスト者のイメージをまず、乗り越える必要があったのであろう。Jane の巡礼の旅はキリスト教的道徳の修業の旅ではなく、より成熟した女性へと成長していく旅であった。Jane が最終的に到達した Rochester との自由と平等に基づく結婚は、Bertha と Rochester、あるいは St. John Rivers が指し示した牢獄としての結婚の対極に位置するものであり、作者 Charlotte Brontë が作りえた唯一の理想的な結婚であった。男女間に横たわる社会的・経済的・性的差異が生み出す問題を強く意識しながらも、男女間の闘いを人間的な愛情に基づく融和へと解消していったところに作者の強い願いが込められているように思う。

註

- ① Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (1847; reprt. Penguin Books, 1987), p. 64. 作品からの引用はすべて、この版に拠る。
- ② *Ibid.*, p. 439.
- ③ ピエール・クースティアス, ジャン・P・プチ, ジャン・レイモン著, 小池滋・臼田昭訳『19世紀のイギリス小説』(南雲堂, 1986), p. 145.
- ④ *Jane Eyre*, p. 113.
- ⑤ *Ibid.*, p. 101.
- ⑥ 例えば, 当時書かれた Elizabeth Rigby の批評は Jane の反社会性・反宗教性を批判しながら, 逆に論者自身の上流階級的意識を露呈している点が興味深い。cf. Elizabeth Rigby, “An Anti-Christian Composition” in *Jane Eyre*, ed. Richard J. Dunn (New York: Norton, 1971), pp. 449-453.
- ⑦ *Jane Eyre*, p. 336.
- ⑧ *Ibid.*, p. 337.
- ⑨ 宗教裁判における異端審問や魔女狩りといった歴史的事実を思い浮かべることが⁵できる。
- ⑩ Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (New Haven and London, Yale University Press, 1979), pp. 336-371.
- ⑪ Samuel Richardson, *Pamela; or, Virtue Rewarded* (1740) のヒロイン。小間使いの Pamela は純潔を守り抜こうとしたその徳の高さを認められて, 大地主 Mr. B の正妻に迎えられる。Pamela は, その道德性の背後に垣間見えるしたたかな現実主義ゆえに批判されることも多いが, 身分違いの結婚という点では Pamela はいわば先駆者であり, 作者は Pamela をかなり意識してこの作品を書いている。
- ⑫ *Jane Eyre*, p. 344.
- ⑬ *Ibid.*, p. 344.
- ⑭ *Ibid.*, p. 444.
- ⑮ Richard Chase, “The Brontës, or Myth Domesticated,” in *Jane Eyre*, ed. Richard J. Dunn, *op. cit.*, pp. 462-471.

(本学助教授 英文学)